

## コーヒーの季節

— エチオピア西部の農村から —

左古 将規

### コーヒーのふるさと

コーヒーは現在、世界中で飲まれている。そのうちもっとも広く利用されているアラビカ種(Coffea arabica L.)の起源は、エチオピア西南部にあるとされる。この地域の人びとは、およそ1,000年もの長い年月にわたってコーヒーを利用してきた、と考えられている【福井1981】。

1998年4月から翌年にかけて、私は9ヶ月間エチオピアに滞在し、そのうち多くの時間を西南部のジンマ地方で過ごした。この地域では今でも、コーヒーが生活に欠かせない。

たとえば、私が懇意にしていた家族の1日は、他の家々と同じようにコーヒーで始まる。朝起きると、娘が土間で炭火をおこす。そこに小さな鉄板を置き、そのうえでコーヒー豆を煎る。煎った豆を叩きつぶし、湯を沸かしたポットのなかに入れる。ポットを火にかけ、よい香りがしてきたら、少し冷ましてから小さなカップに注ぐ。コーヒーには塩を入れ、よくかき混ぜてから家族のもとに行きわたる。眠い目をこすりながらコーヒーをすすると、その塩味が、寝ぼけた頭をきりりと引き締めてくれる。

豆を煎り、コーヒーを淹れる一連のプロセスは、日に何度も繰り返される。家に客人が訪れると、そのたびにコーヒーでもてなす。主人と客人は熱いコーヒーを飲みながら、とりとめのない世間話に興じるのだ。

しかし、現在の村人にとって、重要なのは「飲み物としての」コーヒーにとどまらない。社会的により大きな意味をもっているのは、「商品としての」コーヒーだ。コーヒーはジンマ地方において、もっとも重要な換金作物である。

### コーヒーの季節

1998年の雨季は例年よりも長く、ようやく雨が止んだのは、10月も半ばを過ぎたころだった。新しい季節の訪れとともに、村は活気に包まれた。村のスーク(商店)でひと休みしていると、村人たちが次から次にやってきた。誰もがコーヒーの実でいっぱいのカゴや袋を抱えている。持ち込んだ実を秤にのせ、グラム当たり2ブル(当時1ブル=約20円)程度の現金を受け取ると、意気揚々と帰っていく。



熟しかけのコーヒーの実



ゴジヤム地方からの季節労働者がコーヒーの実を拾い集める

それまで扉を閉めていたスークが、季節限定で次々と開店した。スークでは、1袋1ブル50セントの粉末ジュースがよく売れた。友人どうしが集まって、チャットという刺激性をもつ植物の葉を噛みながら、甘いジュースを回し飲みする。このちょっとした贅沢は、それまで見たことがなかった。

道端には靴磨きの少年たちが現れた。町から村までおよそ2時間の道のりを、歩いてやってくるという。この時期は、町よりも村の人間がカネを持っている。たとえ遠くても、村まで来たほうが儲かるのだ、と少年は言った。

人の流れはさらに遠くからも集まる。ジンマ地方の南に住むクッコロの人びとをはじめ、北はゴジヤムやゴンダル地方から、東はシャワやウオロ地方から、現金収入を求めて男たちが集まる。季節労働者たちはコーヒー林の手入れから収穫にいたるまで懸命に働き、たいていの場合は歩合制で収入を得たあと、故郷に戻っていく。彼らは来年も来るかもしれない。今度は友人を連れてくるかもしれない。コーヒーの季節は、新たな人間関係が形成されていく場でもある。

### コーヒーが村を変える

11月のある日、友人と世間話に興じていた私は、突然の大きな物音に驚いた。村では聞き慣れない機械の音だ。友人に尋ねると、「タンク」が来て道を広げているのだ、という。

友人が「タンク」と呼んだのは、大きなブルドーザーだった。急いで駆けつけてみると、ブルドーザーが黒い煙をあげながら、村の大通りを押し広げていた。大通りといっても、それまでは道幅は狭く、凹凸もひどく、とても車の通れる道ではなかった。3日間にわたる工事で道はすっかり拡張され、整備された。

道を広げる重要な目的のひとつは、コーヒーの出荷を容易にすることであった。それまで、村で採れたコーヒーは、ロバやラバの背に載せて町まで運んでいた。工事以降、毎日夕方になるとトラックが村を訪れた。村で採れたコーヒーの実を荷台に積み、近くの加工場へと運ぶためだ。

コーヒーの出荷が楽になっただけではない。道路の整備が村人の生活に与える影響は、計り知れない。たとえ急病を患っても、ラバの背に揺られて山道をのろのろと行く必要はもはやない、車なら町の病院まですぐだ、村人はそう言って喜んだ。村に電気などのインフラを整備するさいにも、道路はその基盤となるだろう。

ブルドーザーを雇い、工事を実施するために、およそ800人の村人から15ブルずつが寄せられた。道を広げる原動力となったのは、コーヒーがもたらした現金収入であった。

コーヒーの価格は、1991年の政変以降、急激に高騰した。コーヒーの流通と価格を統制していた社会主義政権から、自由経済を標榜する現在の政権へと移行したためだ。村人の話では、政権交代の前後で

コーヒーの価格は5〜7倍に跳ね上がったという（注1）。突然の増収は、村人の生活を大きく変えた。

主食のテフをはじめとする穀物の畑は、この数年で急速に面積を狭めた。自分の畑で作るかわりに、現金で買う人が増えたのだ。たとえば村の谷間にひろがる広々とした草原も、数年前までテフ畑だった。土地の主がコーヒーで儲けて畑仕事を怠けたために、ここは草原になってしまったのだ、と私の友人は語ってくれた。

このころ私は、村の互助組織についての聞き取りを試みていた。村人は近隣で「シャニ」という組織を結成している。シャニの役割でもっとも重要なのは、葬送と服喪にさいしての相互扶助だ。シャニのメンバーは、喪に服している遺族のために輪番制で食事を準備し、持ち寄るのが規則となっている。

1998年、私のよく知るシャニが、その規則を変えた。新しい規則では、会費を多めに徴収し、それを使って食材を買い求め、遺族の家で調理する。言い換えれば、「労働力の提供から資金の拠出へ」という変化だ。その背景には間違いなく、コーヒーの価格高騰による現金収入の急増がある。コーヒーがもたらす現金の流れは、村の「助け合い」のかたちをも変えようとしている。

12月になると、コーヒーの収穫は峠を過ぎ、村には静かな生活に戻った。ある日、道を歩いていた私は、黙々と畑を耕している人に出会った。聞くとチャットを植えるのだという。チャットはコーヒーとならぶ換金作物として、近年、急速に存在感を増している。新たな現金収入を求めて畑を始める人がいる一方で、別の村人たちは、現金を手に入れたら、チャットを買っている。村を歩きかう現金の流れは、ますます加速している。

アフリカ大陸の伝統的な生活に憧れて、私はエチオピアを訪れた。そこで私が目にしたのは、「伝統」の一部が変わっていく場面であった。もちろん、「伝統」はつねに変化し続けてきたもので、私が目にした村の変化も、静から動への突然の転換ではないだろう。しかしいま、コーヒーがもたらす現金の流れを受けて、村の生活はたしかに変わろうとしている。



拾い集めたコーヒーの実を庭先で乾かし、出荷にそなえる

貨幣の浸透をめぐる同様の変化は、この地域に限られるものではなく、おそらく世界的な現象だ。変動の最中にある村社会を、村人の視点から記述し記録することを、自らの目標のひとつにしたいと私は考えている。

（注1）コーヒーの価格は、同じ年でも時期によって、また出荷形態によって異なる。1994年、1ファラスラ（17kg）の乾かしたコーヒーの値段は、それ以前20年間の30〜40ブルにくらべて90ブルに跳ね上がった、という報告もある [Gizachew 1994]。

福井勝義 1981 「コーヒーの文化的特性-エチオピアの西南部の事例から-」 守屋毅編『茶の文化-その総合的研究-』京都：淡交社 pp. 165-211。

Gizachew Abegaz. 1994. Tenure Issues in Coffee Growing Areas: A Case Study of Manna and Gomma Woredas. Dessalegn Rahmato (ed.). *Land Tenure and Land Policy in Ethiopia after the Derg* (Proceedings of the Second Workshop of the Land Tenure Project). The University of Trondheim. pp. 216-227.

（さこ まさのり 京都大学大学院  
人間・環境研究科）